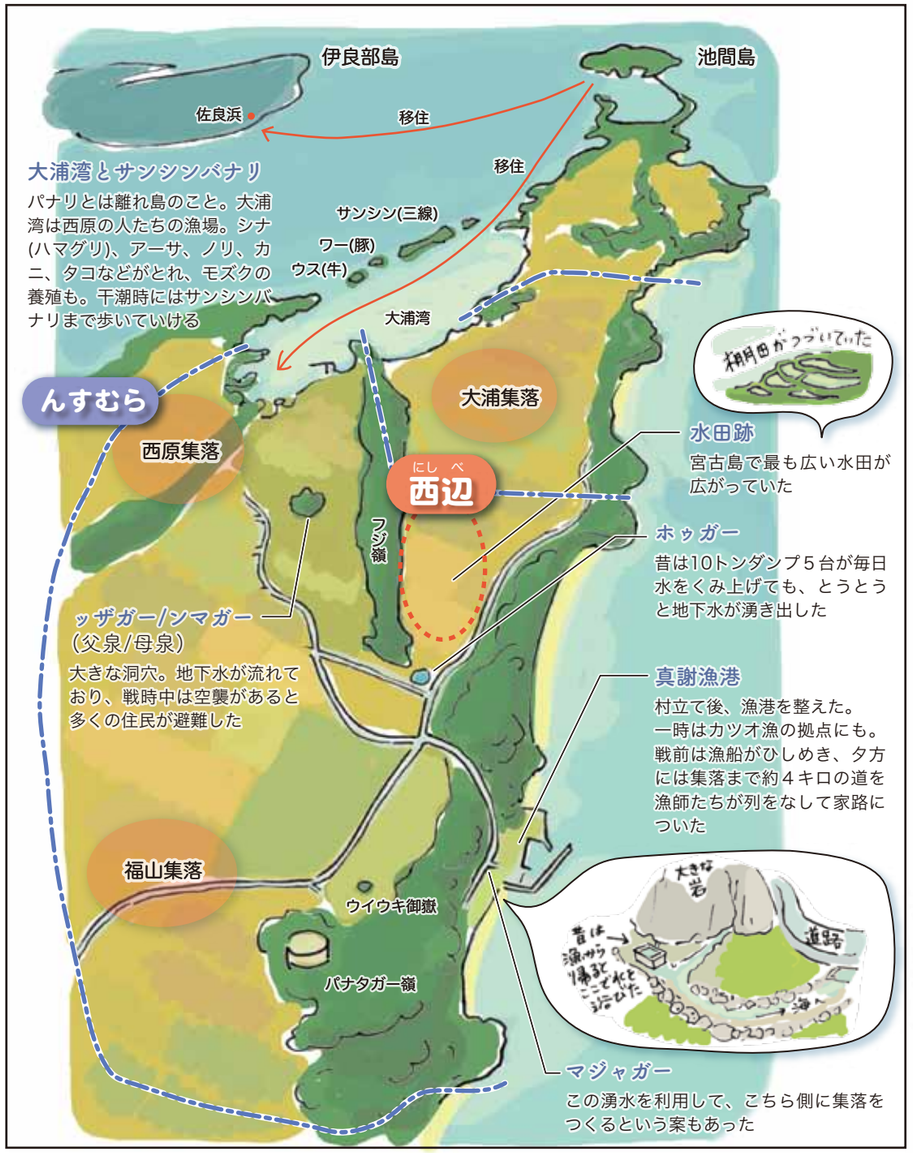
「んすむら」とは、池間方言で西原のこと

んすむら

西原(にしはら)散策マップ

西原は、宮古島中心部から北へ３キロほどのところにある西辺地区にあります。

西辺地区には、大浦、福山、西原の３つの集落がありますが、それぞれ成り立ちやルーツが異なります。明治のはじめ、池間島の分村として村立てした西原には、池間特有の文化や風習に加え、地の利と豊かな水資源に育まれた独自の文化や産業が根づいてきました。



発行：宮古島市文化遺産活用実行委員会 この地図は平成29年度文化庁「文化遺産総合活用推進事業」の採択をうけ制作されました

イーガマ
池間島から移住してきたとき、ここに舟をつけ上陸した

アガイジャトゥ(東里)/イージャトゥ(西里)
集落内を走る83号線を挟んで東西の里に分かれ、ハーリーや綱引きで競い合う

「アガイジャトゥに嫁に行くと水汲みが大変よ♪」

「イージャトゥに嫁に行くと売れ残った小さな魚しか食べられないよ♫」

子どもたちの歌遊び

※御嶽は集落の大事な聖域です。祭祀以外は立ち入りが禁じられています。また、植物の伐採なども禁じられています。

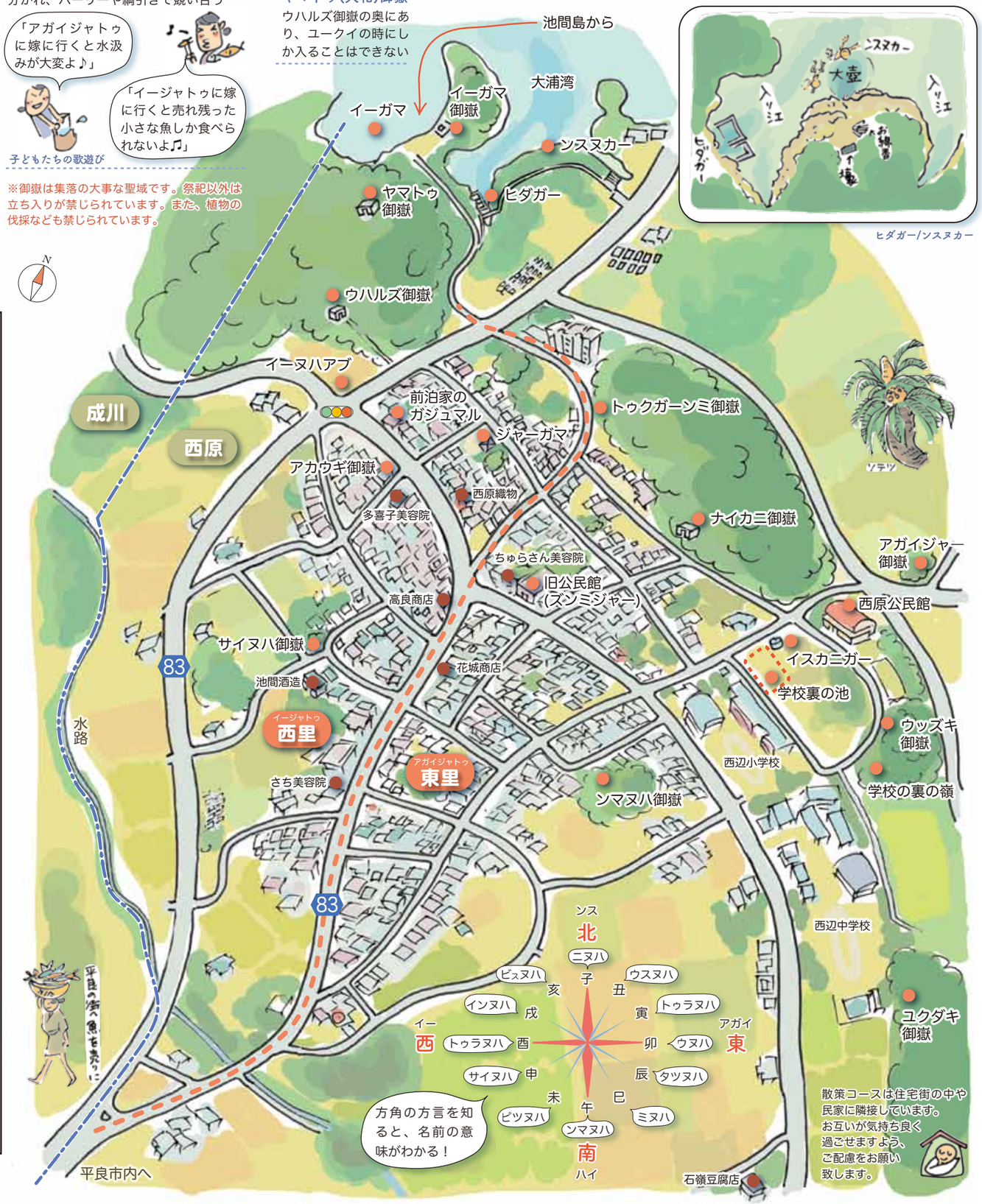
ウハルズ(大主)御嶽
集落の一番大切な御嶽で、島分けの際、池間島のウハルズ御嶽を分祀。すべての祭祀はウハルズから始まる

ヤマトゥ(大和)御嶽
ウハルズ御嶽の奥にあり、ユークイの時にしか入ることはできない

イーガマ御嶽
旧暦６月に「六月ニガイ(龍宮ニガイ)」がおこなわれる。龍宮の神さまに豚を捧げ、それを受け取るために龍宮から使いの白い船がやってくるといわれる

ヒダガー
地下水が海に流れ出る。この豊かな泉が西原移住の決め手。水を利用する人でいつもにぎわっていた

ンスヌカー(北の泉)
昔は水量が多く、砂地がえぐれたホゥツボ(大壺)に飛び込んだりして子どもたちは泳ぎをおぼえた



旧公民館(ズンミジャー)
ズンミは話し合う、ジャーは座。集落の大事な話し合いはここでおこなわれた

ジャーガマ
ミャークヅツでは奉納相撲とクイチャーがにぎやかにおこなわれる

西原地区公民館
西原の文化活動の中心。毎日さまざまな活動がおこなわれ、稼働率は宮古イチ！

ナイカニ(仲間御嶽)
ウハルズ御嶽に次いで２番目に格が高い。西原に血縁をもつ子どもの名前は、この御嶽の神さまの帳面につづられる(マスムイ)

ウッズキ御嶽
昔、ユークイの時には福山集落のウイウキ御嶽まで行っていたが、あまりに遠いので中取りとして造営された

アガイジャ―(東座)御嶽
アガイジャトゥを守る

サイヌハ(申ヌ方)御嶽
申の方(南西)の御嶽。分村後に造営された

ンマヌハ(午ヌ方)御嶽
ユークイでは５番目に巡礼し、女性たちが歌い踊る

ユクダキ(横竹)御嶽
西原の村立て以前にあった横竹集落の御嶽

トゥクガーンミ御嶽
ユークイ最後の巡礼地

アカウギ御嶽
西原村立て以前からある御嶽。里神として近所の人々の拝所となっている

イーヌハアブ
地下は大きな壕になっていて、戦時中は防空壕にもなった。戦後はここにシートーヤ(製糖工場)があった。今は入り口が埋められてしまっている

イスカニガー
先住のイスカニ家が使用していたといわれる。村立ての際にイスカニ家は他の場所へ移動し、カーはアガイジャトゥの里井戸として使われた

前泊家のガジュマル
ガジュマルは神さまの宿る木。昔、近所に住むおじいがマズムヌ(魔物)に追われ、この木に隠れて難を逃れたとか。西原は神高い(霊感が強い)人が多いといわれる

学校裏の池
昔は大きな池があり、洗濯場だった。鯉が泳いでいたことも

学校の裏の嶺
飢饉の非常食糧としてソテツが植えてあった。ソテツには毒があるので、毒抜きをするのに大変な手間がかかった

西原のはじまり

西原は、1874(明治７)年に、池間島の人々が新しく開いた村です。1720年、池間島の人口が増えたことにより、伊良部島佐良浜へ島分けがおこなわれましたが、その後も増え続け、琉球王府の役人から西原に新村を立てるよう命じられました。移住組の選抜は道一つで区切られたとも、役人がクジで決めたとも伝えられます。その決定には逆らえず、親兄弟や恋人同士が引き離されることもあったようです。

池間を祖とする池間民族

西原は、佐良浜とともに池間島を祖とする「池間民族」とよばれる海洋民族の里です。民族特有の信仰や文化、暮らしの風習、言語など宮古の他地域に見られない固有なものがあります。池間民族は漁業が特徴的で、西原も昭和初期頃まで男たちは魚をとり、女たちは畑を耕す自給自足が当たり前でした。当時は何十隻ものくり舟が、漁を終えると帆をかけて競争しながら港に入ってきたといいます。西原では、中心市街地の近郊という立地や、豊富な地下水をもつことなどから、漁業以外の産業や農業も発達しました。

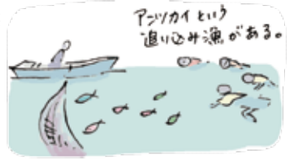
暮らしを支えた豊かな湧水、ヒダガー

川のない宮古島では、飲み水や生活水を地下水に頼ります。豊かな水を確保できるかどうかで、暮らしぶりは大きく変わります。西原には地下水が海に流れ出るヒダガーがあり、それが新しい村をこの地に定める決め手となりました。

西原インダストリー物語

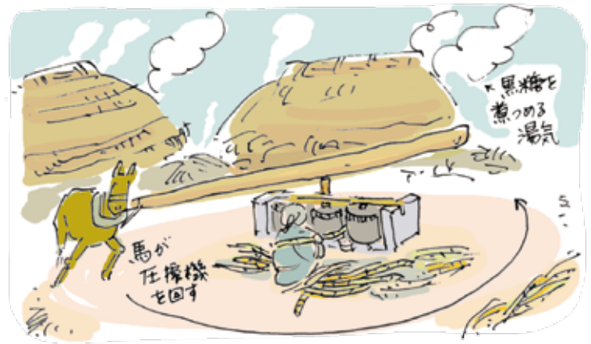
沿岸漁業の発展

池間や佐良浜では明治末期から始まったカツオ漁に沸く一方、西原は沿岸漁業に力を注いできました。かつてその漁場は宮古全島、大神、保良、多良間、遠くは八重山までと広く、漁の種類もアンツカイと呼ばれる追込み網漁や敷網、魚突、釣網と多種に及びました。今でも、西原周辺の豊かな海で、伊勢エビ漁やタコ、カニ漁をはじめ、アーサやモズクの養殖などがおこなわれています。



西原全体が製糖工場！？

宮古島でサトウキビづくりが始まったのは1887(明治20)年頃。当時のサトウキビはススキのように細く、茎の長さも60センチほどだったようです。1901(明治34)年には西原にもシートーヤ(製糖屋)ができました。戦後は13軒にも増え、馬が圧搾機を回してサトウキビを絞り、汁を煮詰める湯気が立ち上る風景が、あちこちに見られました。



粟酒キビ酒と泡盛

1902(明治35)年、人頭税が廃止されると、それまで税として納めていた粟で酒を造ることが流行り、西原でも次々に酒屋ができました。戦時中にサトウキビの酒を造る酒造所があらわれ、その流れは戦後、タイ米と黒麹を原料とする本格泡盛を造る池間酒造へと引き継がれています。

アダン葉会社

明治末期、西原にアダンの葉を商品として扱う会社が誕生しました。アダン葉を帽子の材料として供給するという試みは、家内で日常行われていた手仕事を工業化させるという画期的なものでした。当時、アダン葉帽子は「琉球パナマ帽」として輸出され、沖縄の重要な産業となっていました。戦後、アダン葉帽子の製造を教える教習所もでき、帽子職人として自立する女性たちもあらわれました。

西原の人々と神さま

西原の御嶽(うたき)

御嶽とは人々にとって最も聖なる場所であり、御嶽を中心とする数々の祭祀が暮らしの時を刻みます。西原には大小あわせて17の御嶽がありますが、その多くは村ができた際に、新しくつくられました。霊力の高い物知りが集落の各所にもうけたと伝えられています。御嶽の中心となるのが『ウハルズ御嶽』。池間島最大の聖地ウハルズ御嶽の神々を分祀しました。

ミャークヅツ

ミャークヅツは池間民族最大の祭り。男性中心の豊年祭で、旧暦８、９月の甲午(きのえうま)の日から４日間にわたっておこなわれます。２日目にはナイカニ御嶽からジャーガマ(広場)まで、男たちがクイチャーを踊りながら練り歩きます。

祭祀集団ナナムイとツカサ

西原で生まれた人たちは、女性は数え47歳から57歳、男性は数え50歳から56歳の間、「ナナムイ(七杜)」という祭祀集団に加入し、主な祭祀に参加します。ナナムイの女性たちはユークインマとも呼ばれます。ユークインマの女性たちから選ばれる神女、『ツカサ』は特に重要で、神と人をつなぐ存在として、年間50回近くもおこなわれる神行事『カンニガイ』のすべてを執り行います。

ユークイとウハルズ御嶽

ユークイは女性の豊年祭。ユークインマたちがウハルズ御嶽に籠り、集落にある８つの御嶽を回って、ユー(豊穣)を乞い願います。

西原ヒストリア

人頭税時代のぼうふう

西原村ができた当時は、まだ人頭税時代でした。人頭税とは、薩摩藩に支配された琉球王府が税を払うために、宮古八重山の離島に課した重税で、1637年から266年もの間続きました。島の人々は重税に加えて、役人たちのためにも働かなくてはいけません。西原は、魚をとって平良の役人のところに運ぶように命じられていました。しかし、その道中、盗賊に襲われて、せっかくの魚を奪われることがしばしばだったようです。盗賊たちは「ぼうふう」と呼ばれ恐れられていました。

防空壕にもなった洞穴

集落の東南と北部には、２つの大きな洞穴があり、遠い昔は、人が暮らす住居でもあったようです。戦争中は防空壕として使われ、空襲があれば兵隊も住民もそこに避難しました。

池の鯉

1952(昭和27)年、当時の中学３年生は多良間に修学旅行にいきました。その時、多良間にはカエルがいない、宮古には鯉がいないので贈りあおうということになったそうです。生徒たちはおたまじゃくしを多良間へ運び、多良間の鯉は学校の裏にあった池に放されました。宮古初の鯉は話題になりましたが、その後台風でみんな流されてしまったとか。一方、多良間ではその後、カエルが困るほど増えたそうです。